平安京の都市構造と貴族の行動様式－「移徙」と都市災害－
City Structure of Heiankyo and Behavioral Pattern of Aristocrats －“Watamashi” and City Disaster－

杉橋　隆夫
Takao SUGIHASHI

1. はじめに

本プロジェクトの主要な研究課題は、平安中・後期の平安京とその周辺における貴族の移動や、京都への人の流入および京都から地方の流出について検討を加え、平安京・京都の都市構造と貴族社会における空間移動の問題および都鄙間交流の意義を具体的・総体的に追究するとともに、貴族の行動様式に影響を与える諸用件を解明することを目指すものである。

研究手法上の特色として、伝統的な歴史研究の手法である現地調査・史料読解・分析等に加え、最新のGIS（地理情報システム）技術を導入した点が指摘できる。これらの技術を駆使して、行動軌跡を視覚表示する地図の作製と、これまでに開発を手がけた経路の使用頻度を自動計算するソフトに改良を加えることにより、大量の移動軌跡をビジュアル化する技術の開発に取り組んだ。

今年度の主な研究として、源氏物語千年紀の2008年度、立命館大学グローバルCOEプログラムが主催したシンポジウム「『源氏物語』の読み方－学際的視野から－」（2008年10月11日）における報告をもとに文章化した「源氏物語の時代－人と文物、ディジタル可視化の意義－」の発表と、2009年8月27日「日本心理学会第43回大会」シンポジウムにおける研究報告（佐古愛己「平安貴族の規範と行動」、上島理恵子・佐崎文「平安貴族の心情（こころ）と行動」）があげられる。そのうち、本報告書においては、「平安貴族の規範と行動」で論じた「移徙（わたまし）」に関する研究を中心に取り上げ、貴族の行動様式から窺える都市構造や政治・社会構造と、放火などの都市災害との関係について論じ、防災研究と平安貴族社会研究との接点および新しい分析視覚の提示と今後の課題について記すこととしたい。

2. 移動データベースの作成と経路の視覚化

平安中・後期の古典史料（『御堂関白記』・『小右記』・『中右記』・『兵範記』等）から、年間の移動に関する情報を抽出し、移動主体の身分（出自・家格・官位）、目的、経路（起点・移動に利用した道路名・終着点）などの属性に分類して、典拠史料や年月日別のデータからなる「移動データベース」を構築した。このデータベースは今後もさらに広範な情報を大量に取り込むことにより、また、以下に記す軌跡構築プログラムとリンクさせることによって、時代差・地域差を比較検討したり、記主の身分・階層差による情報の質・量の偏差や空間認識・行動様式の差異が生じる背景を追求して、貴族社会の構造と京都の都市的変遷との関係を検討することが可能になると予想される。

軌跡構築プログラムは前述のデータベースを基に、移動の出発点から目的地への移動経路を視覚化するため、エクセルとアークGISソフトを用いて軌跡構築プログラムを開発した。まず、『平安

京提要』(角川書店、1994 年)の付図を利用し、エディターで平安京の条坊を描き、坊条一辺の大路・小路毎に ID 番号を付して、データベースの道路情報と結合させることにより、経路を視覚化した。さらに、道路毎の使用頻度を罫線の太さで表示することとした。

平安中期の古記録にみえる貴族の移動経路

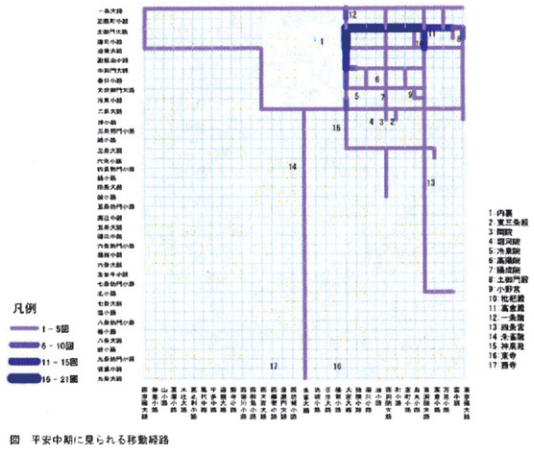

図 平安中期に見られる移動経路

平安後期の古記録にみえる貴族の移動経路

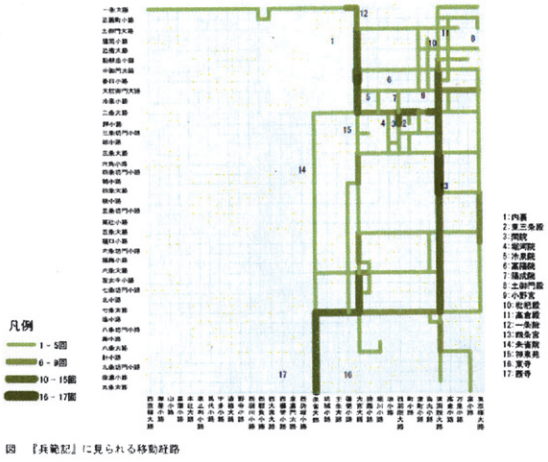

図 『兼範記』に見られる移動経路

(以上の図は、古記録データベース〈本学文学研究科吉岡直人、飯田将吾、木野明佳、中井芳美、中尾芙貴子諸氏作成〉をもとに、文学研究科吉田真澄氏が作成した)

以上のデータベース、軌跡構築プログラムを用いて、人々の行動を規定する諸要素(地理的条件・政治・思想・宗教的背景・災害との関係)に関する考察を視覚的にも分かりやすく表示する基盤整備が完成した。今年度はこれらを用いて 3 つ(①『源氏物語』の空間情報の分析、②平安中・後期における天皇と上皇の移徙(家移り)、③平安貴族の「ワザハヒ」に関する行動様式の特徴についての考察)の研究報告を実施した。平安京・京郊地域における一般的火災・災害情報とのドッキングも現在試行中であるが、以下、報告②を中心に敷衍・叙述する。

3. 平安時代の天皇・上皇の「移徙」

平安初期の天皇は平安京の中心にある内裏に居住し、上皇も特定の院御所に住まっていたが、中期以降になると、里内裏や複数の院御所が築かれてゆき、数多くの居所を頻繁に行き来するようになった。こうした変容は政治・社会構造の変化と密接に関連し、平安貴族の行動や規範意識にも影響を及ぼしたと考えられる。本年度は、天皇・上皇の「移徙」とよばれる行動に注目して、政治・社会構造の変化と規範意識との関係について考察した。

「移徙」とは 住居を移動し他家に渡ることで、特に貴人の転居を敬っていう語であるが、管見の限りでは、平安後期の上皇(院)が同時期に数多くの御所を所有し、それらを頻繁に移動する行動に注目したものはいくつか存在するものの、「移徙」の政治的意義を追究した専論は存在しない。先行研究[i]では、「都市と王権」という視角から分析がなされたものが多く、例えば、白河は六勝寺が

建ち国家的仏教儀礼を行う空間であり、鳥羽は上皇と貴族らとの遊興の場として機能する地であり、六波羅は交通の要衝地、且つ武門平氏の都市であるのに対して、京中（平安京内）御所は叙位・除目・議定のような国政の重要事項に関わる案件を行う場であったというように、京とその周辺地域のそれぞれの「場」の特性が解明され、それらの目的に応じて移動がなされていた実態が明らかにされている。

しかしながら、以上の説明だけでは、移動の大半を占める京中にある複数の御所間の移動がなぜ行わなければならないのかという問題や、単なる移動（行幸・御幸）ではなく、「移徙＝家移り」をする必要性が何処にあるのかという疑問が解決されない。また、そもそも何故に、内裏（里内裏）や院の御所が次々に造営されたのかという問題を考えることこそが、当該期特有の天皇や院の行動の背景を探る上で重要な視点であると思われる。そこで、平安時代の天皇と上皇の移徙について、古記録からデータを採集して移徙データベースを作成し、はじめに天皇の移徙に関する各時期の特色を指摘したい。

平安前期（桓武～朱雀）の天皇は基本的に内裏に居住しており、移徙事例はみられない。しかし、平安中期（村上～後冷泉）になると天皇の移徙が行われるようになる。この時期の移徙の多くは、常の皇居である「内裏」が火災で焼失した際に行われていることが史料から確認できる。『小右記』長和 4 年（1015）6 月 13 日条によると、前年の火災により、三条天皇が道長の邸宅枇杷殿を里内裏としていた際、皇居の修理が終わると直ちに内裏にもどるべきだとする考えを道長が示しており、さらに「私の領に天皇を留め奉ることは、恐れがあることだ」とも語っている。以上のように、平安中期には内裏現存時は内裏を皇居とする原則があったことが道長の詞や、火災以外の移徙がみられないという事例分析からも指摘できる。

ところが、平安後期（後三条～後鳥羽）になると大きな変化がみられる。まず、内裏現存期間にも里内裏が使用されるようになったため、移徙が行われる事由も変化した。最も多い要因は、即位など大きな宮廷儀式を挙行するための移動であり、ついで、前代と同様、内裏や里内裏の焼亡、さらに陰陽道的禁忌と続く。これは、例えば、陰陽道の考えでは、土の中に「土之神」がいるとされるため、皇居周辺での作事において穴を掘る行為は「犯土」とみなされ、これを避ける風習等を示す。

このように、院政期には前代よりも頻繁な移徙がみられるようになるものの、概ね、物理的に現皇居での居住存続が不可能な理由が発生した際、つまり、皇居焼亡や「戦乱・地震」などの非常事態発生、あるいは儀式挙行、もしくは居住不可能となる心理的要因（陰陽道的理由、怪異の出現、祇園御輿避け）など、総じて、「現在の皇居で居住不可能な理由」が発生した際に移徙が行われるのが、天皇の移徙の特徴であると指摘できる。

一方、上皇の移徙に関しては、平安前期・中期には、上皇が存在する時期が短期間であり、事例が少なく、各上皇は概ねそれぞれ基本となる院御所（例えば、嵯峨上皇は冷泉院と嵯峨院、淳和上皇は淳和院など）に居住していた。ところが、平安後期には上皇が頻繁に移徙を行うようになる。その要因としては、天皇と同様に、御所の焼亡、怪異など、居住の存続が困難と判断される明確な事由が発生して行われる場合も勿論みられるが、移徙の理由として最も多いのが、院の御所が「新造」あるいは「修造」されたための家移りである。つまり、「現在の御所で居住不可能となる明

確な理由」が発生した際に移徙が行われるのではなく、造営と関連して移徙が行われるという特徴が指摘できる。

では、なぜ多くの御所が次々と建設・修造されたのか、その要因を探ってみたい。上皇の移徙関連の史料をみると、移徙が行われた当日などに、「重任（ちょうにん）」宣旨が下されたというよう記述が散見している。これは、院の近臣たちが院御所や御願寺などの造営を請け負うことで、その報償として任官（官職に任じられること）されていたことを示している。造営を請け負う行為を「成功（じょうごう）」というが、当時、受領と呼ばれる地方長官は、中央政府に必要な税を納入するとその残りを私物にすることが可能であり、実入りのよい大国の受領は私服を肥やし、大規模な造営を請け負う財政基盤を持っていた。そして、律令制的な財政制度が崩壊した平安後期には、受領の私物を利用した成功が国家財政の重要な柱ともなっていた[ii]。

成功の報償（史料用語では「勧賞」）の内容としては、すでに受領である人物が成功した場合は、同国の受領にもう一期（4 年間）再任される「重任」や、他国の受領に転任する「遷任」が認められ、受領でない人物の場合は、造営に先立ち受領に任命されたりする。さらに、調査を進めたところ、院政期には、特に上皇関係の建物の造営を請け負った場合は、さらに加階（位階の昇進が許可される）を受けるなど、一度の成功で二つの勧賞に預かるという実態が判明した。このように、院御所の造営を請け負うことは、受領にとって大変魅力的な仕事であったといえる[iii]。

つまり、院の近臣等は受領ポストの確保や維持を求めて院御所造営を請け負い、任期切れ間近になってくると、再び、自身が新たな造営を請け負い、場合によっては、その報償を父親から子供に譲るといった形で多くの成功が実施された。その結果、建設ラッシュを招き、都に沢山の院御所が造営され、その建物を院の御所として確定させるために「移徙」という儀式を行い、そこで勧賞が実施されたのである。このように、造営・移徙・勧賞の循環構造が存在していたといえるのである。

なお、皇居造営の場合は一般的には成功という形をとらず、多数の国が分担して造営を請け負う、国宛（諸国所課）と呼ばれる方式で造営される。この場合も、割り当てられた国の受領が勧賞を受けるが、その場合は通常加階のみであり、一国の受領が造営を請け負う成功の方が、負担も大きいが報償も大きかった。

4. 院政期の造営と災害

以上、天皇と上皇の移徙について分析した結果、移徙が行われる要因については、天皇の場合、最も多いのは皇居焼亡といった物理的に居住存続が不可能であること、もしくは怪異や陰陽道的禁忌などのような心理的な要因から居住継続が不可能となる明確な事由が存在した。そしてまた、即位儀など内裏での儀式挙行の必要性に迫られた家移りであった。それに対して、上皇は天皇と同様、現在の御所での居住存続が困難な場合に移徙が行われる場合もあるものの、最も多い要因は、「新造」「修造」である。その背景としては、院政期、上皇は「成功」という人事・財政システムを構築することによって、大規模な造営に関わる財源を確立することに成功したが、ポストの確保・維持を求めた近臣等が、次々に院御所を造営した結果、移徙を実施し続ける必要性が生じるという社会システムの存在が見受けられる。つまり、上皇の移徙の背景には、当時の人事・財政制

度が関連していると指摘できるのである。このように、「移徙の儀」は、主に陰陽道に関連した儀式であり、平安時代の天皇・上皇・貴族の行動は、現代人から見ると非合理的で、不可解な行動のように認識される傾向がみられるものの、「移徙」という行為を発生させる要因は、極めて現実的な理由が大きく作用しているという点を併せて指摘したい。

最後に、都市構造や政治構造と災害（放火）との関係についての見通しを述べておきたい。平安中・後期における天皇・上皇の内裏・御所の度々の焼亡は、先行研究によると放火を原因とする火災によることが多い。放火という都市災害の要因は、従来の研究においては、律令制的都市支配制度の形骸化、解体による治安・監視機構の弱体化が治安の悪化を招いた結果発生するとみなされたり、都市民による権力者への不満のはけ口として引き起こされたと指摘される。しかし、本研究で明らかにしたように、摂関・院政期における天皇・上皇の移徙（家移り）が、放火による火災を主な原因とし、その結果として、新内裏や新御所の造営が頻繁に行われた事実、さらに、それらの造営には受領の成功や国宛が利用され、その結果、彼らが報償を受けたという実態があった。そして、特に院政権の場合においては、政治・経済の重要な基盤である受領らの身分保障に直結するという現象に注目すると、政治・経済・人事的目的から、意図的に創出された放火と造営事業が存在する可能性を予測させる。都市災害の要因に関しては、多面的に検討する必要があることはいうまでもないが、如上に示したような新しい視点から更なる分析が可能であると思われる。

5. おわりに

今年度の研究において、摂関・院政期の最も主要な都市災害である放火が、新たな造営事業創出のために意図的に起こされる可能性を発見するとともに、院政期の大規模開発と成功、知行国制の成立とが強く関連していることを予測した。当該期における都市災害（放火）の背景に検討を加えつつ、災害と内裏・院御所の造営をはじめとする都市開発との関係性から、中世都市京都の形成過程および都市災害の要因を具体的に検討することを今後の課題としていきたい。

[i] 井上満郎「院御所について」（御家人制研究会編『御家人制の研究』吉川弘文館、1981）。美川圭「京・白河・鳥羽－院政期の都市－」（『日本の時代史7』吉川弘文館、2002）。大村拓生『中世京都首都論』（吉川弘文館、2006）。高橋昌明編『院政期の内裏・大内裏と院御所』（文理閣、2006）など。

[ii] 上島享「平安後期国家財政の研究」（『日本史研究』360、1992）、同「受領成功の展開」（井上満郎・杉橋隆夫編『古代・中世の政治と文化』思文閣出版、1994）

[iii] 佐古愛己「摂関・院政期における受領成功と貴族社会」（『立命館文学』594、2006）